特11
917

091750-000-1

特11-917

笑家用文庫

瘦々亭　骨皮道人／著

M23

DBO-0224

笑家用文章の序

何事も便利な世の中といひ申しながら一年の氣候ばかりは例も同じ事ばかりなれど春の陽氣ふしぎ浮れ出し度なり夏の素的お暑くして頭の脳天から燒付られ秋は涼しけれども何となく物凄しく冬は滅法界お寒くッてダラリ翠玉も梅干のやうに相成候得ど

も病身の人ハ論外として達者なお方ハ何
處までもピンシャンと御暮し成され候段
提燈を逆ゟ云ッて珍重の至ゟ存ド奉つ
り候次ゟ道人儀も例の通り骨と皮との痩
ッ保痴なゲら有難い事ゟは一命ゟ別條な
く相變らぜ出放題の寐言を並べて大切な
月日を無益ゟ送り借金を重荷ゟ背負て困

借〳〵と相暮し居り候間苦勞性の人ハ御
心配下さるべく候イヤ餘計な事ハ扨置て
此度米代の埋草ゟ笑家用文を著作候間笑
ふ事のお好なお方ハ澤山ゟ御買下され度
若し又笑ふ事ゲお嫌ひならバ御買下され
ぜとも宜敷候ゆゑお錢を持て來て此本を
御持歸り下され度此段平々平突張て直買

奉つり候也 狂惶珍言

明治廿三年今月今日

痩々亭骨皮道人 再這

大日本帝國三千八百萬の人々樣 御中

笑家用文章目錄

○新年ゝ友を招く文
○同返事
○馬鹿ゝ附る藥を問合せる文
○同返事
○洋行をる人ゝ送る文
○同返事
○馳走ゝ成りしを謝をる文
○同返事
○下戸の人ゝ送る文

○同返事
○道樂息子を戒むる文
○同返事
○借家の周旋を頼む文
○同返事
○女房を世話をする文
○同返事
○新築落成ゐ付人を招く文
○同返事
○金を借る遣る文

○同返事
○死去見舞の文
○同返事
○養子ゑ行たる人ゑ送る文
○同返事
○無人ゐ付人を頼む文
○同返事
○雪見ゑ誘ふ文
○同返事
○忘年會を催ふを文

特1
917

○同返事
◎諸笑書の部
○金圓借用の笑
○抵當借用金の笑
○預り金の笑
○地所賣渡しの笑
○家屋讓り渡しの笑
○借家の笑
○雇人引受笑
笑家用文章目錄終

笑家用文章

痩々亭骨皮道人著

○新年ゟ友ゟ招く文

一筆啓上仕り候と鹿爪らしく出程の事件でハ之なく候得ども貴君も娯笑痴の通り別嬪ハカチン〳〵と羽根を突き鼻垂餓鬼ハブー〳〵と紙鳶を飛し何となく陽氣の心持致し候處只一人盆檜と破屋ゟ籠城致し居候も

餘り氣の利ぬ事と存ゞ候より日頃よりあき非常の奮發心を出し濁酒よりても一杯飲度と存ゞ候得ども是迄も一人よりて面黑のらせ候間貴兄若し欠伸の温習中ゐ候はゞ是非御入來下され度此段一寸御樣子相伺ひ候オット忘れた勘定い例の通り頭割より御座候也

○同返事

貴君儀新年の陽氣より欺し込れ頭割勘定よりて

一杯飲度旨御申し越の趣き例ならゞ莞爾と大黑笑ひよりて笑痴致そべきの處近頃い少し く了簡あつて腹の虫と相談を致し飲うら飲までい禁酒致し居候間今日の處チェー殘念あゞら御斷り申し上候尤も貴君の奢ならゞ子の兎々と飛出し隨分お相手より成らぬ事も之なく候ゆゑ今一應御考への上男らしき御案内を願ひ度候也

○馬鹿ゝ附る藥を問合せる文

藪うら棒あゞら愚弄面ゝ一寸御尋ね申しあげ候扨貴君儀ハッイ去年頃まで青ッ鼻を二本垂し人ゲ天麩羅の立食をるのを見てダッ〳〵と涎を流し或ひハ文久錢二文を以て花料を買ゝ行なゞく取ても附あい調子ッ外れの寐言を云ふやうな木偶の坊ゝ之あり候ゆゑ世上の人々ハ貴君の事を馬鹿だ馬鹿だと專ら言觸し居候處夫ゲ此節ハ不思議ゝも蕃椒を嚙で辛と云ひ砂糖を嘗て甘と云ふ樣な智惠の出來さるハ定めし何ゝ藥ても附て其樣ゝ成られ候事と存ド候就てハ今差當り馬鹿ゲあると云ふ譯ゆハ之なく候得ども後學の爲心得置度候間包み隱しあく尋常ゝ白狀を願ひ度候也

○同返事

其許の鄙書此元の尊眼あて御一覽相成候叱らば其許儀世ゲ開げて人間ゲ利口よなるのを羨敷おもひ轉挺舞をせられしの但しハ米の高價のよ吃驚して贍玉ゲ逐電せし儀なる歟僕を醫者の藥店ゑ何ぞの樣よ方角を取違へ馬鹿よ附る藥ハ無いのと御尋の趣き醫者意笑痴致し候然る處僕ハ凡そ天上天下ある有らゆる何事でも知らぬ事ハ無い位の物

知博士なれば鼠捕藥蝿捕藥蚤捕藥虱捕藥鼻藥などハ素より心得居候得ども未だ馬鹿よ附る藥ハ存ト申さぞ併しながら出來内證談と云ふ書物の中よ馬の角と鹿の牙とを黑燒よして之を智惠袋よ入れ嘘八百度振出して飲ば如何なる功勞を經た馬鹿よても忽ち利口者と成と書てありしやよ相覺へ候併し是とても未だ試驗して見たる儀よは之無く候

得ども知らぬと云ふも強腹ゝ付此段一寸知た振の假聲を遣ッて御返事申し上候也

○洋行をる人ゝ送る文

今日不圖風の便りゝ承はり候得ば貴君儀今般西洋人ナンダベラボー氏ゐ隨ひ飼犬の番人として亞米利加の田舍へノコ〳〵サイ〳〵と出掛られ候由西洋人とさへ云へば土方人足でも銀行の頭取と肩を比べ私窩子阿魔で

も貴夫人と同格の交際をする時節殊ゝ一旦洋行それば縱ひ彼の地でゝ乞食をしても歸國の後ゝズッと身体ゐ直打ゲ附き化の皮ゲ剝るまでゝ隨分法螺の吹張合も之あり候事ゆゑ縱ひ飼犬の食殘しを食ても苦あれば樂ありと辛抱して片言交の洋語を間嚙り山の芋ゲ鰻ゝ化る頃無事ゝ御歸鄕相成候やう富ませぞして御待中しあげ候就てゝ燒鍋壹本

甚だ輕少よゝ候得ども聊ゝ餞別の驗までよ
進上致し候若し口髯と頭の毛とを燒て赤く
そるの道具よ御用る下され候ばゞ幸甚々々

○同返事

エヘン拙者儀今般多年の宿志を遂全權公使
を拜命しさ譯でも何でも無けれど愈々米利
堅國の倫敦へ洋行そる事ゐ相成候得ども若
し此事を愛婦的の耳へ入さあら左こそ嘆ゝ

ん不便やと存ド重次郎を氣取てソッと拔出
そ積りよ御座候處何處のら何知れたの貴君
よ嗅出され候のみならず色々の多話言を突
れ且つ人の氣の附ざる燒鏝まで御送り下さ
れ有ゲさく蜻蜓返りして熱く御禮申しあげ
候實ゝ眼玉も此儘よてゝ定めし移りゲ惡の
らうと存ド鰯の目やら秋刀魚の目やら色々
と入目の用意ゝ致し候得ども髯を赤くそる

處より未だ氣ゲ附ざりし處流石の貴君此よ
お氣の附れしハイヨ怠長エヲーイと手前の
都合の宜時ハ響て置候餘ハ彼の地へ到着の
上郵便代ゲあつたら手紙よて申し上候也
尙々日本三千有餘萬の兄弟分へ宜敷御傳
聲を乞ふ

○馳走よ成しを謝そる文

昨夜ハ參堂空腹へガブ〳〵引掛候ゆゑ素敵

滅法界よへドレケと相成前後忘却とハ酒飲
の紋切形チト古臭い文句よハ候得ども實以
て前後忘却無茶苦茶よて如何なる事を相働
き候哉更よ覺へざるのみならず我家へ歸る
べき道さへ相忘れトウ〳〵お馴染の警察へ
轉げ込み今朝ゑ至ツて懇々説諭を受けヤッ
ト放免歸宅致し候位よ酩酊致し候段有ゲた
く御禮申し上候猶此後とても右樣の御馳走

之あり候節ハ是非頭數ヨ御加へ下され度此段堅くお約束を致し置候也

○同返事

昨夜は親父の誕生日ヨ付内輪の者ばゝりヨてコツソリと一杯飲度と存ド居候處何時の間ゐゐ貴君ヨ嗅付られて飛込れ候より飛でもない目算違ひを生ド候のみならず上句の果ゐ熊野郎と拳骨の振廻シツ競をおツ初められ夫ゲ爲ヨ皿小鉢徳利等を粉微塵ヨ打毀されるやら小僧ゲ飛出して行て巡査さんを呼で來るやら其中親父ゲ目を廻して醫者へ駈付るやら夫ハ〳〵一方ならぬ大騒動ヨて近頃閉口致し候間以來ハ當方ゐら案内を致し候までハ飛入を御免蒙り度此段御返事旁堅く御斷り申し置候也

○下戸の人ヨ送る文

一杯献上致し候酒佳らゞ貴兄儀不酔を生れ附とゝ云ひながら御神酒あゞらぬ神ゝ無いと云ッて八百萬の神々様でさへ朔日十五日ゝ雀の涙ほど宛でも召食り酒なと飲で浮くしやんせと藝者も歌ふ位お結構な酒を嫌ひ只團子や牡丹餅をムシヤ〳〵食て胃病の虫を可愛がられ候ゝ如何なる名酒ないお心餅ゐ候や飲多苦連の圖部六ゝ酒々相分ら

ざる酒第ゝ御座候若し其儘ゝて舷飲を送り候はゞ一升買の耻猪口とも相成申そべく我杯も友人の上戸として酒乱顔もして居られざる譯ゝ付貴兄ゐ於ても徳利と娯酒案の上今後ゝ膳の上ゝても一杯ッゝ御飲習ひ成されて候方酒ゝるべくと存ト候間酒の功能を並べ樽新休酒歌を相添此段御用酒を相伺ひ候也呑酒再杯

一新体酒歌

酒ハ憂ひの玉箒。飛切無類の名藥ぞ。飲べ飲ほど心、地よく。借金取も何の其。上野の櫻隅田堤。花見遊山ヨ夕涼み。藝者遊びや女郎買。婚禮祝儀仲直り。目出度席ヨ酒なくべ。手持無沙汰の限なし。飲や飲々圖部六ヨ。女房を質ヨ置とても。朝飲酒ハ格別ぞ。醉拂ふべし倒るべし。

○同返事

誤酒面拜見意茶し候酒貴醸儀無茶苦茶ヨ我茶〻水を引き酒々の苦茶を卷られ候得ども一茶意全茶意酒と申そものハ世ヨも狂氣水と唱へる位の毒藥ヨ御茶候ゆゑ和茶くしより禁酒の宣告を意茶そべくと存ド居候處豈ヨ葉茶らんや猪口才ヨも屁茶粉茶の茶加茶間ヨ酒を飲と云はれ生來酒のサの字も嫌ひ

な和茶くしゝ甚だ留飲の虫ゐ茶話る儀ゝ御茶候干菓子なゞら茶用ゝ杵で鼻を縛るやうゐ挨茶つも甘利興ゞ無さ過候ゝ付宜加減ゝお茶を濁して置て後ゝ新製の詩菓ゝて胡麻菓子ゝる御返事即ち茶の如しへイ茶用なら

新製詩菓

酒ゝ身体ゝ大毒ぞ。酒ゝ氣狂水ぞうし。無口の人も饒舌出し。貴人の前も憚らぬ。喧嘩口論敲き合ひ。お巡りさんの御厄介の家庫まで飲潰し。親兄弟ゝ見放され。五尺の身体困るより。蒸菓子羊羹金米糖。噛ッて居れば大丈夫。食や食へ〳〵諸共ゐ。花より團子食ふべし。

○道樂息子を戒む文

拜呈叱らゞ昨晩貴兄之ヲランプ親父ゲヒヨコ〳〵と御入來ゐて泣言を並べられ候を聞ゝ

貴兄儀此節ハ何處の何様な黠姉ヨ魅れしの素敵ヨ浮れ出しノホヽンの遣子のサと内を外ヨして野良倉致され候出貴兄ハ素より活智のある方ヨハ之なきゆゑ「賈家を唐様で書く三代目」だの「青樓ゐ耽る息子を餅ヨつき」だのと云ふ氣の利たる業ハ迚も出來間敷ホンノ玉代丈でチョン〳〵格子ヨ轉寐をする位ゲ關の山あるべしとハ存ド候得ども夫ヨし

ても餘り譽た話しヨハ御座なく候間若し女郎買ゑ成さるならバ十ケ年間吉原を買切て仕舞とゝ又ハ藝者遊びをするならバ新橋と柳橋を百年間持切とゝ少しハ人間並離れさ業を致され候樣ヨ願ひ度左も無くバ素邊多女郎ゐ目尻を下げ三文藝者ヨ涎ゑ垂そなどハ思ひ切てお止成され候方然るべくと存ド候間此段一寸お手柔ゑヨ一本參り候也

○同返事

今日只今遞信省のお役人郵便の配達先生ゲユーピンと威勢よく一本の手紙を投り込候ゝ付定めし情婦よりお迎ひの玉章あらんと存ド候處豈ゝ料らんや貴兄より生意氣の差出口ゝて實ゝ落贈致し候就てハ貴兄ハ全体石地藏ゝ上下を着せさやうな四角張の屁痴固人足なれバ色男の色男さる眞味を御存ド

無きより麥酒と馬の小便とを見分る事ゲ出來ない譯ゝ御座候抑々余輩と愛婦との間柄ゝ於るハ中々以て一朝一夕の事ゝハ之なく比翼の鳥も舌を卷て逃出し連理の枝も芽を引込て恐れ入る位の合惚主義あれバ余輩と愛婦の身ゝ成て見なければ迚も眞味の處ハ相分り申さぜ夫故余輩より離れんと欲そる愛婦ゝ於て一刻も離れぜ又愛婦より離れ

んと欲するも余輩お於て一刻も忘るゝ事ゲ
出來ないと云ふ樣な込入た譯ヨ相成居候得
バ貴兄などの不粋な黑幕人足ハチョンと柝
木ゲ鳴たら出て入ッしやる樣ヨお賴み申し
度候也

○借家の周旋を賴む文

小生儀是まで當所の裏長屋ヨ尻を落附て粥
と雜炊ヨてヤット命を繋居候得ども御存ド

の通り九尺二間の手狹ゐて惣雪隱と掃溜と
ハ鼻の先ヨ在てプンゝと香ひ蛆虫と蚯蚓
ハ目の前へノッ〳〵と這出て來て喧嘩をも
るお負ヨ家根のらハ雨ゲ漏り壁のら風ゲ吹
込み根太ゲ腐れ疊ハ破れ何分ヨも我慢が出
來ざる處へ家主のらハ毎日〳〵朝晩ヨ店賃
の催促をするなど以ての外の不人情ヨ付流
石の小生も今度と云ふ今度ハ堪忍袋の口を

解き早速何處への巣替致し度と存ト候處若し一等煉瓦の三階造の又ば土藏附の日本普請よりも宜敷間口は貳拾間以上奥行は五拾間以上よりて家賃は何ヶ月溜ッても催促を仕ない樣な借家の又ば只遣ふと云ふやうな相當の家御座候はゞ至急御世話下され度此段御依頼ふおよび候也

○同返事

貴君儀今般家主より店立を食ひ據ろ無く御轉居の事よ相成候よし嘸々御愁傷の儀とお察し申し候夫よ付き家賃入ぞの借家を周旋して呉と殊勝よも頭を下て小生へ御依頼相成候段男氣の小生なれば嫌應なしよグッと呑込み承知致し候就てハ幸ひ只今素敵滅法界よ手廣の家一軒之あり是ハ間口奥行共よ何千里と云ふ程よて庭よハ富士の山や琵琶

の湖等もあり見晴しも眼の行届く丈ゝ眺めるも勝手次第併し天井ゝ青天井と云ッて人の住丈よゝ出來居候得ども時とそるると雨ゲ漏たり雪ゲ漏たり霰ゲ漏たり雹ゲ漏たりそるゝも知れざるゆゑ夫さへ御承知ならば家賃ゝ入らぬ家ゝ付何時よても御世話致そべく候間篤と御考へのの上御申し越成さるべく候也

○女房を世話そる文

過日御依頼相成候貴君の女房儀其後自腹を切て處々の裏店を相尋ね候得ども何分冶郎相當の者之なく候よ付實ゝ人の疝氣を頭痛よ病で腕組致し居候處待ゞ海路の日和とやら此度ッイ近所よて貴君相應の化物阿魔之あり候ゆゑ早速よ聞合せ候得ば先方の申そよゝ縦ひ乞食でも穢多でも望人さへあれば

二ッ返事で扣き出をと申を事ゝ付別紙人相書を相添一寸誤笑談申し上候若し思召も之あり候はゞイッ何時でも見合を成さるべく候尤も其節ゝ目を廻さぬ爲め寶丹と熊の膽とを御用意成さるべく候

人笑書

一面ゝ世ゐ云ふ重箱面ゝて四角張さる方尤も色ゝ黑塗の極念入ゐ御座候

一鼻ゝ獅子ッ鼻と申して横ゝ駄々ッ廣く思ひ切り上を向さる方なれゞ二階より火事の初まりし時などゝ第一番ゝ嗅付役を務むるなるべし

一口ゝ鰐口と云ッて隨分木魚の口よも負ぬ位なれゞ薩摩芋と南瓜を一所ゐ頰張も聊ゝ差支なし殊ゝ齒糞はオギヤアと生れて以來一度も洗はぜゐあるゆゑ縱

ひ百疋の蜂に刺れるとも薬あり困らぜ

一目い皿眼と云ッて人並の二三倍もあれば蚤や虱を取るは至極詳へ向なり尤も一眼は少し疵物あれども物の見當を附るるは一ツ眼の方ゲ却ッて都合ゲ宜と申せ事なり

一手は杵の如く尻は臼の如く殊に足は左右に長短あれば歩行度毎に踊るやうで

中々面白し

一言葉遣ひや身の行狀い親の異見さへ屁とも思はぬ程の豪的なれば山の神と成て井戸端へ押出せとも決して引い取らぜ日ならぜして議長となるい顯微鏡を以て毛虱の臟腑を見るゲ如し

○同返事

奇書拜讀然らば小生に相應の女房之あり候

越きまして誤丁寧なる人笑書を添て御申し越
下され候段有難くも何とも存ド奉らぜ候就
てハ御申し越の條々親類ハ申そゐ及ばぜ日
頃出入の者並びゐ地主差配人月行事等を呼
寄逐一ニ相談致し候處小生の如き業平男ニ
左様な化物を女房ニしてハ九段目のお石で
ハ無けれど提燈ニ釣鐘釣合ぬハ不縁の基ゐ
り殊ゐハ拙宅の如き人出入の多き家ゐて來

る人毎ニ女房を見て目を廻されてハ女房の
爲ニ醫者を抱て置様な事も出來致そべきゐ
付先づ是ハ寄らぜ障らぜ君子は危きニ近寄
そと臭い物ニハ蓋をして逃さ方ゲ宜ろうら
と醜議一決致し候間此段男らしくキッパリ
と御斷り申し上候也

○新築落成ニ付友を招く文

郵便税二錢を惜む譯ゐハ之ゐく候得ども御

近邊まで幸便之あり候ゝ付刷序ゝ御案内申し上候扨拙者儀未だ母親の腹の中ゝ居頃より雪隱を臭く無いやうゝ建築致し度と一生懸命ゝ無け無しの智惠を絞り雪隱萬苦致し居候處今般漸く其思苦志を遂げ三疋立の惣雪隱落成致し候ゝ付右思苦意を表する爲ゝ大糞發を爲し糞燒了簡を以て來る三十二日大愉快を催ふし度就ては何の風情も之なく

候得ども聊ゝ粗酒一杯差上度候間同日猫の刻より何なり共祝の品物を携へて御糞臨下され度此段七面倒ながら御案内申し上候也

○同返事

刷序のお手紙拜見致し候然らば貴兄儀多年苦想を凝しさる雪隱漸く出來上りゝ付其祝として割前を取ぎゝ御馳走相成候由ゝて底拔上戸の拙者までを頭數ゝ算へ込られ候段

吝嗇坊の貴兄は近頃の上出來嘘でハ無いのと思ふ計り感珍致し候就ては折角の御案内ハ付早速參堂尻を落付てガブ〳〵飲度と存ド候得ども お手紙を見るハ何の風情も無く粗酒一杯云々と之あり折角御馳走ハ相成候ハ何の風情も無く只粗末な酒を一盃位頂戴致し候てハ腹の虫より苦情を云はれた る節申し譯ハ相困り候間此度の處ハ思ひ切て御斷り申し上候也

○金を借ハ遣る文

強腹紛れ臥して申し上候叱らバ自分色男儀ハ危殿も娯笑痴の通り天下無双飛切大極上々吉笑評つきの美男子あして東西南北天地乾坤至る處別嬪ゐ袖を引れ袖も袂も何處へのモギ取れ據ろ無くチヤン〳〵の袖なしを着て居る次第ゆゑ自ら○も入用ハ付此間

より度々手紙を差出し最早小賣壹錢ヅヽの卷紙十五六本と一對八厘の小筆十本ばかり費し事嚴重わお掛合申し候得ども今以て文久錢處ゝ目腐錢半欠をも御貸下されを候ゝ如何なる誤了簡ゝ候哉通人の大頭領ゝゝ更ゝ相悟れざる儀ゝて不人情とも吝嗇坊とも人非人とも人面獸心とも馬鹿冶郎とも出額助とも廿五座の瓢ッ床とも頓痴機とも撥髮

奴とも何とも勘とも申し樣のない危殷ゝて此樣な戯惰者ある故ゝお上の御苦勞も絶ざる儀と存ド候元來金と云ふ奴ゝ天下一般の融通物なれバ有者ゝ無い者ゝ之を與へ無い者ゝ有人ゝ依て之を借り倒をゝ今更申をまでも無く百も二百も拙者丈ゝ笑痴致し居候況てや御同樣ゝ三千有餘萬の兄弟なれバ外の事ゝ扨置き金錢だけの融通ゝ親類交際ゝ

仕度ものゝ御座候尤も有時拂ひの催促なしと云古來より貸借上の危則なれバ此邊もチト誤勘考ありて然るべし通人の口ゝ斯まで細密ゝ註釋を加へて申し述るも誤笑諾なきゝ於ても拙者も通人色男の面皮ゝも關係し折角面白く遊ぶ積りの登樓も粹を通ぜ待合遊びも殆んど狐脚と云ふ場合ゝも立至り餘儀なく酒も飲ぜ都々一も謠はぜ三味線も

聞のぜ手踊も見ぜ實ゝ盆槍して猿の木のら落さるゞ如く河童の陸ゝ揚られたるゞ如くゝ相成候ゝ付危殿ゝ身代限りそして椀を叩いて歩行とも今まで旨物を食て生長さる此色男は矢張何處までも色男なり通人なり依然として先祖を辱しめざる樣七日七晩位は胸ゝ手を當て篤と御思案之あり度候併し是程まで長文句を並べ立るも到底一文も貸事

ん成らぬと云ふ樣を解らぎ屋なれば最早千篇萬篇繰返して云ふも無益とあきらめ思當り次第燈心で縛りあげ線香で痛くない樣よ張倒その外ん之なく候まだ〳〵此位な事でん申し足ぎ候得ども馬の耳ゐ念佛蛙の面ゐ水ゆゑ此邊よて一先お事戯ゐ致し候再這

○同返事

長たらしく牛の小便然たる御紙面御遣はし

よ付お手元ん御面倒樣の暇潰しゐん候得ども讀無ければ何の用やら分らざるゆゑ據ろ無くザッと披見致し候然らば貴兄儀此節借金の爲よ首も廻らざるより面よ千枚張の鉄假面を被り猪武者と成て拙者へ嚙り附れ生來正直の拙者ん殆んど御挨拶よ當惑致し候併しながら四海ん皆兄弟とやら申ぎ事殊よ友人ん相身互の事よ候得ば今後ん兎も角も

此度丈ハ畢玉を質ニ置ても御入用たけ何程ニても御用達申し候ト申せバ定めし貴兄の御意ニハ入り申を可く候得どもドッコイ爾旨くハ間屋で卸さぞ候元來貴兄は何を貸て も約束通りニ返されニ事更ニ之あき誤人物ニ付誠ニ不安心ニ存ト候且つ拙者ハ御存ト の通り人の苦みは三年でも五年でも根氣よく辛抱をる人間なれば縱ひ貴兄ゞ舌を食切

て死ふとも川へ飛込で土左衛門と改名を成さらうとも拙者ニ於てハ河童の屁とも思はぞ候間左樣誤笑引下さるべく候ハックション一昨日御座れ

○死去見舞の文

只今友人凡太郎より聞噛り候得ば貧家の鬼婆アさん儀大變な狂印ニて久敷瘋癲病院の厄介ニ御座候處此度阿彌陀如來の勸みより

突然お舌を食切て地獄へ旅立と出掛られ候由お歳の上とい申しながら隨分酔狂な婆さんゝ之あり且つ貴家ゝ於ても人前でい何との艱とゝ云ッて涙を溢し眞似を成さるゝい世間のお突合ゝて據ろ無き事なれど其實は首尾能く厄介者を追拂はれ殊ゝ諸式高直の時なれバ一入御滿足の御儀と存ド奉り候就てい小子も葬式の饅頭丈は頂戴致し度候間

葬式は何日の何時頃ゝ候哉御知らせ下され度尤も香奠の儀は時節柄お付差上不申候也

○同返事

拙宅の老母死去ゝ付人並ゝ御愁傷とも悔みとも何とも云はゞ奇々妙々變挺來の寐言を御申し越ゝて馬鹿を其儘顯され候段却て面白く相覺へ候夫ゝ付葬式の日限御問合せゝ候處右い昨年の二月三十日午後十三時ゝ出

棺を致し候其節貴君へも一寸御報知申し上べきの處其頃貴君は何處へ逃亡中よて影も形も無く山の神と餓鬼は空腹を抱て毎日〳〵メソ〳〵と泣暮して居られし時なれば滅多あ甘い言葉を掛て飼犬よ噛付れるやうな事ゞ有ては溜らんと思ひしゆゑ知らん顔の半兵衛を極置候尤も只今よても香奠さへ御持参なれば田舎饅頭の二ッや三ッハ御馳

走致そべく候也

○養子よ行たる人よ送る文

一書這呈然らば貴君儀ハ兼て活智の無き男と聞及び居候處今般愈小糠の三合よまで見放され何の何兵衛方へ養子よ潜込れ候由蹇食虫も好々とハ云ひながら七八ヶ間敷養父母よハ土頭を壓へられ家付の婦貞腐れ娘よハ臀の下よ敷れ彼方へ行ても此方へ行ても

米搗虫ゲ年始ヨ來さやうヨペコ〳〵とお辭儀ばゝりしてヤットの事で三度の飯を貰ッて食ふ始末といイヤハヤ獨立の根性ッ骨ゐ乏しき海鼠同樣の人間と申しあけ奉り候併らながら生家ヨ居られ候ても矢張り親父の臑を嚙ッて母親の臍繰金でもホザクル丈の事なれバ田を行ても畦を行ても同し事ヨハ候得ども無益飯食の減さるハ親父さんヨ於ても

嘸々御滿足と存ト候間兎ヨ角目出度御儀と祝ひ納め參らせ候也

○同返事

損書拜讀然らバ世界ヨ稀なる好男子の私し儀今般出雲の神樣ゐ撰擧せられ小野の小町の再來ノと怪まるゝ頗る大極上々の別嬪と緣を結び候處貴君儀涎を垂して羨敷思ふの餘り岡燒の惡垂口を叩ノれ候段實ゐ抱腹絶

倒お臍で茶を沸を儀ゐ御座候成ほど仰の如く養子と申を者い氣の利たる事よい之なく候得ども併しながら貴君の如く饑饉年の稽古見たやうよ食や食ぜで其日を送るよりい人の身代を只貰ッて浮世を野ン氣よ送る方ゲ遙の増よ御座候お負よ僕を鍔よせねば死て化て出て來ると云ふ眞實心の深い花嫁あるなどい斯男振よく生れて來さお蔭ぞと内

々腹の中で相喜び居候貴君も生れ替ッて來時よい僕のやうな美男子よ生れてお出成さる可く候右聊の惡垂口の御返報まで大畧此の如くゐ御座候閉口頓首

○無人よ付人を頼む文

拜呈然らバ悴馬鹿藏儀昨日胃袋を試驗をると申し馬肉を天麩羅ゐして凡そ拾二斤半ほど相食し候處急よ脹滿質の腦膜炎と相成今

日ハ犢鼻褌で頭を縛ッてウン〳〵と迂鳴今
ハも死去さうな容体ヨて相臥居候旁俄ヨ無
人と相成誠ヨ困却致し候夫ヨ付貴君へ少々
御依頼申し度儀之あり開は何事ヲと申そヨ
貴君も娯笑痴か娯笑痴で無いヲ知らねど拙
宅の澤庵石は十八貫六百目ありて世間並よ
りは少々重い出來ヨ候得ども悴馬鹿藏ゲ達
者の時ハ悴の役として之を持上候ゆゑ何の

世話も無ヲりしヨ同人が右之通りの病氣ヨ
てハ外ハ持上る者之なくハテ何しさら宜ヲ
んべエと當惑致し候末只今不圖心附しハ貴
君ハ隨分馬鹿藏ハ負ぬ程の糞力之あり候趣
むき兼て悴馬鹿藏より聞及候ヨ付てハ甚だ
御苦勞千萬なゲら悴の病氣全快そるまで貴
君ゲ代理と成て壓石を持上るの役を御務下
さる儀ヨハ參らぬ候哉尤も朝飯前ヨハ中々

持上らざる石に付毎日朝飯後お御出下され度其代り旨く持上らば譽て差上可申候也

○同返事

御書面拝讀致し候陳れば御四足馬鹿藏君儀馬肉を食過て馬苦打倒れられ候由私しの人の事なれば痛くも痒くも思はぜ候得ども親の身に成て見れば早く死て呉れば宜ゞと閻魔王に引取れるを嘸々御待兼の事と存ト候

夫に付其飛ッ尻を私しへ御擔込お相成澤庵の壓石を持上て呉と折入て御頼みの趣き委細笑諾致し候私しの全体人に物を頼まれば渠車の後押でも風船の綱引でも嫌と申さぬ男に付早速参上日に幾度でも御好み次第美事に持上て差上申そべきの處私しの未だ力持の鑑札を受ぜ候間止を得ぜ此儀ばかり一寸体裁よく御斷り申し上候也

○雪見ヨ誘フ文

此雨三日ハメッキリと寒さを増し嘸々嘘を成され候事と存ド奉り候夫ヨ付昨夜よりの大雪ハ又格別ヨて枯木も急ヨ花を咲せ野雪隠も俄ヨ土蔵造りと相成候ハ誠ヨ美事ヨ付何處へも震へ出して(是ハ浮れ出しての間違)一寸湯豆腐ヲ何ヒを淡泊と一酌を催ふしかぐら陽氣ヨ遣ヒ雪ハ巴ヨ降頻るとも又風流

の道で遣ヒ初雪やせめて奈良の大佛の頭までとヲ何とヲ遣ては如何ヨ候哉貴君若し御同意ヲ候はヾ此手紙届き次第一升樽を提て拙宅まで御飛込下され度候也

○同返事

仰の如く此二三日は餘程嚴敷寒さヲ候得ど寒中は寒いもの暑中は熱い者と昔しから相場の極ッて居譯なれヒ格別不思議ヨは存

ト申さゞ候扨又昨夜より大雪ゟ付今日は雪見ゟ震へ出ては如何と狂氣染た事を御申し越相成候得ども是迚も昔しゝら極り切た事ゝて鴉は黑い者雪は白い物なれば左程珍重して此寒苦勞敷のゟ態々風邪を引ゟ出歩行ゝも及ばぬ事と存ド候間其樣な馬鹿〳〵敷事ゝ眞平御免と蒙り度候也

○忘年會を催ふゞ文

出拔なゞら大急ぎゟて一寸申し上候扨月日の立ゝ實ゝ鉄砲玉の飛で還らざるゞ如く今年も最早纔ゟ二三日の鈍詰りまで押詰候より借金取ゝ人の氣も知らぜゝ四方八方ゝら押掛氣の小さを僕なぞゝ目を廻しゝせぬゝと自ら心配をる位ゟ御座候就てゝ此苦しみを忘れんゞ爲め糞燒連中相集つて忘年會を催ふし明廿九日より來る一月一日まで無茶

苦茶ゟ酒を飲續け借金取を閉口させて此暮を凌ぎ度と存ド候處貴兄の御心底ハ如何ゟ候哉此段御相談致し候也

○同返事

出拔のお手紙拜見致し候如何樣光陰ハ屁玉の消て痕なきが如く何時の間ゟやら嫌な大晦日ゟ近寄候夫ゟ付借金取を誤茶魔菓さんゲ爲ゟ糞燒の忘年會御催ふしの由如何ゟも

結搆ゟ事ゟて小子ゟ至極賛成ゟハ候得ども小子儀ハ先祖よりの家例として毎年廿五日頃より戸棚の中へ潜り込み握り飯を食て借金取を追拂ひ候事ゟ相極り居候間小子丈ハお氣の毒樣ゟゲらお仲間を外れ候也

◎諸笑書の部

○金圓借用之笑

一金重耻圓也　但し利子い誤危則の通り

拙者儀今般米代ゟ差支首を縊らうかイヤ命ゲ無くなる腹を切らうのイヤ赤い血が出て痛いたらうハテ何したら宜らうのと握り拳玉をして三日三晩寐る目も寐ぎゐ勘考の末據ろ無く貴殿へ泣付候處流石ゐ貴殿い有ゑ

の吝嗇坊だけ有てチヤンと貯金玉ゟ死金ゲ用意して有しより澁々ゐ誤笑諾清水の舞臺ゟら轉げ落た氣で前記の金圓御貸下され候處實笑也然る上は是より一生懸命ゟ酒を飲み女郎を買ひ其遣ひ殘りゲあつさら大威張で返濟致そべく若し其期ゟ至り嫌應を申し候はゞ痛く無やうゟ拳骨を御食はせ相成候とも決して一滴の涙も相溢し申を間敷候後

笑の爲め酔て管を卷く

年月日　　頓田奴太㊞

糟和損太郎殿

○抵當借用金之笑

一金苦圓也　但し利子ハ只此抵當貧棒一ッ
火の車一代火の雨を降そ器械澤山

私儀此度云ふ云はれぬ仔細之あり候て逃亡致し候ゑ付てハ一文の旅費も無き之相困そ候より前記の通り先祖代々家の厄介ゑそ

る火の車貧棒火の雨の降らそ器械を抵當として貴殿より小遣し錢を借用致し候處實笑也然る上ハ來る明治百年十二月三十一日限り返金致そべく積りよハ御座候得ども金錢上の事ハ兎角間違ひ勝の者ゑ付若し其時よ及んでヅル〳〵ベッタリよ相成候はゞ右抵當品へ熨斗を附て進上致そべく候仍て後笑の爲め件の如し

年月日

馬登鹿藏殿　　押賀強㊞

○預り金の笑

一金意痴圓也

右ハ危殿ゲ親父の財布より胡麻化子たる金よて越中犢鼻褌へ縛り附て置ても若し向ふより外れると困ると心配で溜らあい處ら拙者へ御預け相成候處實笑なり然る上ハ何時たり共御入用の節ハ御返し申そべく候得ども其節ハ親父さんよ相談の上お渡し申その左も無くバ口塞ぎと預り賃とを兼体よて半額丈ハ僕ゲ頂戴致そべく候依て後笑の爲め預り金笑一札件の如し

年月日　　虫野好藏㊞

夫手餘勘平殿

○地所賣渡しの笑

一拙者住居の鼻の先よりある掃溜一坪の地所ハ全体金樫懲兵衛の所有より御座候處今般拙者の手前勝手より二束三文の安直を以て貴殿へ賣渡そべき約定致し候處實笑あり然る上は此掃溜の儀より他より如何樣な馬鹿者ゲ飛出て屁理屈を並べるとも拙者より於てハ些とも頓着せぞ只安戯樂閑として高見の見物を致し居候間其節は貴殿が買主ゆゑ本

氣より成て強情を張り喧嘩相手よりお成なさるとも拙者は決して御迷惑ともお氣の毒とも思はぞ候ゑ付貴殿より於て何とでも處分をお附成さる可く候仍て後笑の爲め件の如し

年月日　横取舌藏㊞

金輪梨藏殿

〇家屋讓渡しの笑

一平家一棟　間口三寸五分　奥行二寸八分

右家屋へ過日水天宮の縁日ゝ於て撰取百文の玩弄物店より買取候以來拙者の所有財産ゐ之あり候處今般都合ゝより戸障子其外糊付の儘タッタ五厘の口錢ゐて貴殿へ賣渡し代金正ゝ受取候處實笑也然る上は右家屋の儀ゝ附ては世界萬國の中誰一人として苦情ケ間敷事を申す者之なきは勿論若し苦情を云ふ者之あり候節へ奴頭を張固繰れ候共拙

者ゝ於てへ痛くも痒くも之なく候仍て後笑の爲め件の如し

年月日

宇曾輪岩内㊞

南田箆坊殿

○借家の笑

貴殿御所有相成居候凍驚市寒多區貧乏町始終苦番地の内間口九尺奥行三尺の建家雑作疊建具有形の儘一ケ月の家賃金十二錢五厘

の約定にて拙者借受候處實笑あり然る上に大抵間違ひ無く家賃を差上候積りなれども若し一ヶ年以上相滯り候節に保笑人へ御掛合の上御取立下され度若又保笑人に於て一ヶ年を經も辨償致さゞ候節に裁判所へ御願出の上店立を御申し付相成候とも其期に及び決して卑怯末練の泣言に申を間敷候仍て保笑人連印慥なる借家の笑件の如し

年月日

借主　小松田紋太郎㊞

保笑人　何尾勇藏㊞

損名琴太郎殿

○雇人引受笑

圖部六長男

青鼻垂太郎

年齢十三七ッ

右之者儀今般二割五分の手數料を頂戴して貴家へ雇人に放り込候處實笑也尤も此鼻垂

小僧ハ中々横着ナ奴ヨテ喧嘩口論ハ勿論使ヨ出セバ道草ヲ食テ肝心ナ用向ヲ忘レ買物ヨ遣バ棒先ヲ切テ買食ヲ成シ内ヨ坐らして置バ錢箱の錢ヲ摑み出シ小言ヲ云ヘバ逃出シ頭ヲ張バ派出所ヘ駈込やうな手ヨモ齒ヨモオヘヲ烹テモ燒テモ食ない代物ヨ候得ヲモ馬鹿と剪刀ハ使やう一ッの者なれバ成ベく御由斷の無い樣ヨ御使成さる可く候若し

萬一貴殿のお手ヨ餘りて叩き拂ひを食せられ候節ハ何事も、私しヨ於て引受申さゞ貴殿ヘ、聊、この御迷惑相掛候哉も計り難く候仍て後笑の爲め件の如し

年月日

骨折損太殿

無駄口菊雄㊞

笑家用文章終

明治廿三年五月廿一日印刷
全　廿三年五月　五日　日出版
定價金貳拾錢
東京市日本橋區本石町貳丁目拾六番地　發行者　覺張榮三郎
全京橋區南傳馬町貳丁目五番地　發行者　水落忠次郎
全神田區錦町貳丁目三番地　著作者　西森武城
全京橋區南鍋町壹丁目八番地　印刷者　角張敬四郎
全京橋區南傳馬町貳丁目　發行所　目黑支店
全日本橋區本石町貳丁目　發行所　上田屋

版權所有